

郡市医師会だより



春はまだ遠し

津久見市医師会

金田 雅俊

初の医師会報への寄稿となります。津久見市医師会の金田です。

昨年9月の激甚災害指定となった水害により、未だに市内では家屋の取り壊しによる空地が増え、家屋の修理が続いています。我が診療所周辺は最も被害のひどかった地域の一つであり、高齢者世帯の転居により、過疎の波に拍車がかかっています。当院レセプトは減る一方ですが、市内の老人施設は満床の状態が続いているようです。

水害後には“がんばろう津久見”や“チームつくみ”をスローガンに市民一体となって復旧・復興に全力を注ぎました。

また、各郡市医師会様からのご援助、ご協力、ご配慮及び市内外の多くのボランティアの皆さんには感謝の念が耐えません。微力ではありますが、医師会立病院の職員及び医師会員の奮闘により医療・公衆衛生活動は滞りなく行われています。

医師会立の津久見中央病院は昨年9月から様々な事情で3人の常勤医師が減り救急を支える体制がとても厳しい状況です。

今年は天候も例年になく寒い日が続いていますが、当市では“九州で最も早く春の訪れを体感しよう”と、四浦半島では河津桜まつりが開催されました。イルカ島ではイルカの赤ちゃんが生まれ、元気よく育っています。

3月下旬には「青江ダム」の山桜まつりが開催され、鮮やかな春を満喫できます。また、大分大学の内科人材についての新しい取り組みによってうれしいお知らせをいただきました。

地域のみなさんにとって水害後の穏やかな「春」が来ることを心からお祈りしています。

マグロも待っていますので、是非「つくみ」を一度訪れてみてください。



地域包括ケア時代に 必要なICTネットワークとは

臼杵市医師会

舩 友 一 洋

数年前から『地域包括ケア』という言葉をよく耳にするようになりました。「町ぐるみの支え合い」「地域の総力戦」などと表現され、その地域の実情に沿ったその地域ならではの地域包括ケアシステムの構築が必要とされています。このシステムの構築には多職種協働や情報共有がkeywordとして取り上げられ、ICTの活用も大切とされています。

“うすき石仏ねっと”は平成20年にその名を用いるようになってから徐々に発展し、現在では医師、歯科医師、薬剤師、看護師、保健師、栄養士、歯科衛生士、ケアマネジャー、社会福祉士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士など多くの職種が参加し、情報共有が行われています。まだまだ十分に活用されているとは言い難く、連携の効果を示すデータも十分出ているわけではありませんが、徐々に活用件数は増加しています。患者や市民が持つ「石仏カード」の発行枚数も毎月増加し、現時点（平成30年2月）で1万8千枚に達しています。また、救急時や災害時にはカードによる同意なしでも情報を活用させていただくことになっており、消防署の通信指令室では積極的に運用され、実際に救急現場では活用されています。

日医IT化宣言2016において日本医師会は、安全なネットワークの構築並びに地域医療連携・多職種連携をITで支えることを謳っており、このために医療等IDの創設や医療等分野専用ネットワークの構築に邁進していると、平成29年度日医医療情報システム協議会で報告されていました。総務省や厚生労働省においても医療・介護に関連する多職種が参加するネットワークの活用や医療等IDを活用するという方向性は共有されているようです。

臼杵市医師会では総務省のクラウド型EHR高度化事業を受託し、今年度中に完成すべく努力しています。事業の概要は①広域活用（中部医療圏の複数の病院および北部医療圏（豊後高田市）との情報共有）②乳幼児健診、ワクチン接種状況等の情報のスマートメディアからの閲覧 ③医療介護連携専用SNSアプリを活用した在宅診療情報の“うすき石仏ねっと”への取り込みなどです。①により、大学病院などの大病院からの検査や処方・調剤情報も“うすき石仏ねっと”で閲覧可能となり、逆に大学病院からも閲覧できるようになります。②は母子手帳の電子化です。今後は乳児期・幼児時期の情報だけではなく学童期の情報も共有すべく行政と協議を始めています。

今回の総務省事業では、大分中部医療圏および北部医療圏の一部の医療機関や調剤薬局との情報共有が可能となります。大分県全体で医療・介護情報が共有されればいいと思います。そのためには県医師会、各郡市医師会および県の方々に今後ますますのご理解とご協力をお願い申し上げます。



「親 睦 会」

中津市医師会

梶 原 真奈美

中津市医師会には、健診センターとファビオラ看護学校があります。それぞれに問題を抱えており、各担当理事が中心となって問題解決に取り組んでいます。

看護学校には准看護学科と看護学科があります。准看護学科は開校以来、資格試験の合格率100%を維持しています。しかし近年学生の定員割れが問題視され、いかに受験者数を増やし、退学者をなくすかなどを話し合っています。

さて、私が理事になり今年で6年目となりました。理事になる前は会員の先生方とほとんど面識がありませんでしたが、現在は先生方の名前や顔も判る様になりました。これもひとえに親睦会のおかげだと思います。親睦会は夏に開催される“納涼会”と、冬の“忘年会”があります。納涼会には家族も参加し、子ども向けのかき氷やゲームコーナー（昔の祭り風）が設けられ、全国に名をあげる中津からあげも出店されています。私が一番気に入っているのは、会場の真ん中に設置された酒コーナーで、ワインや日本酒、焼酎に加え珍しい地ビールも置かれています。理事になった当初はなかなか酒コーナーに行けず、羨望の眼差しで見つめるだけでした。2年目からは乾杯が終わると酒コーナーに飛んで行き、理事の小路先生に美味しいお酒や飲み方を教えてもらいました。それからビール・日本酒・焼酎を注ぎ、テーブルに集まった先生方に挨拶し、話をする様になりました。納涼会、忘年会のおかげで交流を深めることが出来ました。

郡

市

医

師

会

だ

よ

り



別府市医師会の近況

別府市医師会

矢田 公裕

別府市医師会の活動をご紹介します。

3年前よりCKD・糖尿病・リウマチについて基幹病院との連携を図るための地域医療連携パス委員会を立ち上げました。基幹病院から専門医、診療所の専門医などを招集し、連携の基盤作りや医師向け啓発セミナー、市民公開講座の開催などについて検討しています。CKDでは、毎月班会議を開きセミナーや市民公開講座の打ち合わせ、啓発の進め方などを検討しています。本年12月3日(日)に「第3回別府市CKD予防講座」を別府のビーコンプラザフィルハーモニアホールで10時より開催します。市民向けに腎臓病の解説や運動・食事等の注意点を分かりやすくお話しします。同時に減塩を進める「うま塩屋台」や大分県臨床検査技士会のご協力による検尿や血糖測定などの健康チェックイベントなどを併催します。また、一般医への連携として、中学校区毎に小グループミーティングを開き、CKDへの対応と専門医・行政との連携がスムーズになるようにディスカッションを行っております。この1年半で一通り終了し、二回りめを計画しています。これらの委員会活動を通じて、医師会・薬剤師会・市の連携がうまく取れるようになり、保健師による保健指導も順調に増加しています。他の行政との折衝もスムーズに進むようになっています。

今後糖尿病やリウマチでもさらに連携を進めていき、がんや認知症などの分野にも手をつけていきたいと考えています。

また、立ち上げから6年を経て、医療連携ネットワークである“ゆけむり医療ネット”も別府市はじめ日出・杵築・国東等に広がり、基幹病院と診療所、行政、薬局、歯科、訪問看護ステーションなどと連携を強めて行っています。来年度はセンターサーバーをクラウド化する予定で、更に市民に使われるネットワークに育てて行けるよう準備をしています。

昨年の熊本・大分地震で露呈した、会館の耐震問題やヘルパーステーションの収益悪化の問題、看護学校の経営問題も依然として残っていますが、少しずつ解決できるように一步一步対策を進めています。

さて、来年平成30年には別府市医師会は創立100周年を迎えます。11月25日(日)に大分県医学会と併催で記念講演会を別府市公会堂にて開催いたします。この建物は別府市が市制施行記念事業(現在市制92年)として昭和3年に建設したもので、現存する鉄筋コンクリート造の建物としては県内最古のものと言うことです。設計は当時の有名な建築家である吉田鉄郎氏であります。随所に建設当時の部分が残っており、一見の価値があります。どうぞ皆様、ふるってご来場ください。

別府市医師会を今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

郡市医師会だより



『公立病院勤務医の時間外労働』

大分市医師会

井上 敏郎

最近、一般企業にとどまらず病院の勤務医についても痛ましい過労死の報道が続き社会問題となっています。

新潟市民病院では2016年に後期研修中の女性医師が過労自殺し、新潟労働基準監督署から長時間労働の是正勧告が出ました。

国が示している過労死の判定基準は、所定労働が1日あたり8時間の場合、残業時間が月100時間以上、あるいは直前の2～6カ月平均が月80時間以上とされていますが、新潟県が実施した13の県立病院では過労死ラインを超えた医師は延べ105人、月100時間超えは延べ23人であったと報告されています。

病院勤務医の残業時間の集計はそのほとんどが自己申告であり、各診療科部長の確認が加わるとはいえ正確さに欠くところがあります。他方、電子カルテのログ記録はある意味正確ですが、電子カルテにアクセスしている時間が全て労働なのか、自己研修は含まれないのか、明確に区分され難いところに問題があります。

新潟市民病院では是正勧告後、緊急対応として救急は三次救急患者、一般外来は紹介患者のみに限定した診療制限を実施しました。他に代替できる医療機関が存在する都市ではそのような対応も可能なのでしょうか、制限できない地域や診療領域もあるのではないのでしょうか。

一般的な勤務医は早朝から病院へ行き、受け持ち患者を回診し、患者ごとの指示出し、カンファレンスで上司や仲間と情報共有、交換、その後、手術室、外来、特殊検査室等での業務をこなし、その合間には急患への対応、カルテ記載、各種書類処理、さらに栄養サポート、緩和、褥瘡対策などのチーム医療への参加、感染防止、医療安全、医療倫理研修の受講があり、知識、技術の習得、向上のため学会での発表、参加を行っています。また、受け持ち患者の急変、応援診療のため時間外呼び出し、定期的に割り振られる日直、当直をこなしています。

患者側の単一主治医志向、医師法の定める応召義務にがっちり固められた勤務形態が一種の勤務医文化として根付いているのが実情です。

このような労働文化の中で働き方の見直しを始めるには病院内滞在、時間外労働、自己研鑽の定義を労使で整理し、話し合う必要があるのではないのでしょうか。そうしないと本来の時間外労働協定(36協定)の意味がなくなります。時間だけをタイムカードや管理システムで追いかけてもこれもまた片手落ちとなります。

当面の過重労働軽減策は、主治医制を回避しやすいICU等での交代制導入、医師業務の権限移譲促進、医療秘書増員、当直明け早退、休暇取得促進等ではないかと思います。

政府は一億総活躍社会の実現に向けて働き方改革を進めています。医師の残業規制については2年の検討期間の上、5年後実施を目指して行く方針となっています。

今後はしかるべきところで、これまで踏み込まれなかった応召義務や自己研修と業務の区別についても十分な議論が積み重ねられることを期待したいと思います。

代替医療機関のないまたは乏しい分野、例えば高次救命救急、周産期、小児医療などを担当していることの多い公立病院を預かる者としては、医師の時間労働規制についてはより切実な問題と感じています。

これからも医師が地域社会、ひいては国全体へ掛け替えのない役割を果たし続けるための改革が進んでいくことを願って止みません。





「供養盆踊り」

宇佐市医師会

植 山 敬 久

宇佐高田医師会病院は、昭和56年4月に宇佐市・豊後高田市の中核病院として、宇佐市南宇佐に100床でオープンしました(現在は感染症病棟4床含む110床)。当院の基本理念である地域医療への貢献・「肌のぬくもりある医療」を実践し地域医療へ取り組んでおります。この地域においての第二次救急指定医療機関であり、365日昼夜を問わず救急患者さんを受け入れています。すべての診療科はありませんので、当院で診療できない場合は他施設への移送など適切に対応しています。さらに地域医療支援病院、へき地医療拠点病院、災害拠点病院、第二種感染症指定医療機関としての機能も果たしております。今年からは心臓リハビリテーションを開設しました。循環器疾患においては、カテーテルインターベンション、投薬治療、心臓リハビリテーションにより治療を行えるようになりました。

さて今回の郡市医師会だよりとして、宇佐高田医師会病院で毎年開催されている「供養盆踊り」についてご紹介したいと思います。毎年8月この一年間当院でお亡くなりになられた物故者に対し、供養盆踊りを行っています。ご遺族の皆様、患者様、そして各地区の皆様にも参加していただいています。

今年は8月26日土曜日、午前中に激しい雨が降り続き中止かと思われましたが、午後より晴れ、会場設営を行い19時より開始となりました。西村医師会長(宇佐高田医師会病院理事長)、柏木院長から物故者・ご遺族の方々への追悼の意が表され、参加者全員で黙とうを行った後、供養盆踊りが始まりました。医師会病院近隣の地区の皆様が竹灯籠を設置して下さり、大変幻想的な雰囲気の中、多くの職員がゆかた姿で大きな二重の踊りの輪ができました。職員も事前に地区の皆様にご指導頂き練習したおかげで、たくさんの方が踊りに参加することができました。親睦会主催のかき氷や綿菓子等の出店、景品抽選会も好評でした。また、今年も例年以上たくさん子ども達が集まり、縁日コーナーではワイワイと賑わっていました。提灯で飾られた会場に、やぐらの上の口説き手の声も良く響いて、盛況のうちに無事終了することができました。地域の皆様とも交流を深めることができ、大変良い供養を行うことができました。当院は地域の皆様に支えられている病院だということを改めて実感しました。来年以降も供養盆踊りを続けたいと思っております。



2017. 北部九州災害を経験して

日田市医師会

山 田 和 典

7月5日、日田・朝倉地域は突然の豪雨災害に見舞われました。死亡された方がおられた為、5年前の北部九州災害時より、局地的には被害が多かったと思われます。被害を受けられた方には、心からのお見舞いを申し上げます。特に、小野地区・大鶴地区・豆田地区の方々は、被害も甚大で、日々の生活にも困られており、大変なご苦労だと悲しんでいます。今回の突然の豪雨災害で、日田市医師会の危機管理体制が試されました。医師会長を中心として緊急対策会議を招集され、避難者の医療体制の構築・避難所への医師派遣など話し合われて、災害直後に早急な対応をされて、とても立派なことだと感心しました。今回の災害では、消防署・救急告示病院の被災はなかった為、救急業務は普段通りに行えました。水害であった為、外傷患者が次々と運ばれて来る訳では無く、死亡された方の検死業務や被災された方で体調不良もあり入院された患者さんは多かった様です。これが、地震災害だったら、救急告示病院もマンパワー不足に陥るだろうと危惧されました。

我々西部医療圏は、大分大学のドクターヘリが使用できる以前から、久留米大学のドクターヘリのお世話になっていました。現在も、久留米大学のドクターヘリと大分大学のドクターヘリを使い分けています。今回の災害では、ドクターヘリよりも、自衛隊のヘリが活躍したようです。

今回の災害で分かったことは、緊急支援の受け入れに関しても、常日頃から指揮命令系の決めごとを、作っておかないと、支援活動がスムーズに行えないことが判明しました。今後の課題です。

2017九州北部豪雨災害にご支援頂いた方々に、厚くお礼を申し上げたいと思います。



災害発生当時の日田市大鶴地区の様子
(病院職員撮影)

郡市医師会だより



玖珠郡医師会 戦後70年の節目

玖珠郡医師会

武田 大威

玖珠郡医師会事務局に保存されている過去の記録を紐解いてみると、郡医師会が社団法人として県知事に申請し、許可を貰ったのが昭和22年11月となっている。今年は70年の節目を迎えることになる。社団法人設立当時の記録を読むと、会費を徴収する会員数が41。玖珠・九重の地域にかなりの数の医者が開業していたことが伺える。その後、昭和36年ごろに37人という数字が出てくるが、昭和52年ごろには今とほぼ変わらない27人になっている。現在A会員とB会員を合わせて25人である。医師の高齢化、休診と減少していくのは玖珠郡にとどまらない問題である。

戦前、戦中の医師会はどうのような活動をしていたのか想像してみるしかないが、軍医として応召された先生方も多数おられたようである。戦地にご主人を送りだした奥さんがたは、物資のない中で、繕い物などをして子どもを育てたと伺う。戦後復員したご主人が医院を開業する際には奥さんがたの内助の功が支えになったに違いない。

聞くと、別府市医師会では今年が創立100年になるという。我が医師会も過去の資料が残っていれば100年の歴史があるのかもしれないが残念ながら記録がない。法人設立時からの記録が少し残っているので、この記録から読み取れることや、先輩会員の記憶に残っていることなどを集めて70年の記録として残したらどうかと考えている。

記録では当時の大分県知事、細田徳寿氏の名前で社団法人玖珠郡医師会の設置が認められている。昭和30年代には当医師会で検査センターを建てるという趣旨で会員に出資金を募ったことがあるようだ。当時のお金で会員から5万円を出資して貰って土地の登記もしているが、その後医師会で検査センターを立てるという話はどうなったのか、不明である。当時の医師会の先生方が意気軒高に検査センターを造ることを夢見て語り合ったのであろう。会員の名前は当然一昔前の院長先生方で、今の医師会員のオヤジさんや爺さんに当たる。当時の名簿には明治22年生まれの方を筆頭に明治生まれの方が5人居られる。生年月日の早い順に並べると、上から13人までが明治と大正生まれである。

昭和も後半になると、医師会が行っている検診業務や学校医や行政からの依頼など、その内容は今とほとんど変わらない。地域にあって住民の保健衛生、医療を地道に行ってきたのが開業医の私たちであると胸を張って言える。

時代の変化が地域に及ぼす影響を受けながら、これから先の医師会の在り方も工夫が必要であろう。国はいろいろと施策を打ち出してくるが、玖珠郡には玖珠郡の課題がある。広域であるが故のアクセスの悪さは、高齢者の診療に大きな壁となっている。少子高齢化は人口減少を招きいずれ「消滅都市」となると指摘されている。我々は、そこに住民が生活している限り医療を行う。村を守るために医療をなくすわけにはいかない。

郡市医師会だより



竹田市医師会について

竹田市医師会
伊 藤 恭

竹田市医師会の活動をご紹介します。

竹田市医師会は主に竹田医師会病院・訪問看護ステーションに加え、豊後大野市医師会との共同運営の豊西准看護学院の3つの事業を行っています。以前は、検診事業として竹田健診センターの運営を行っていましたが、人員確保の困難もあり、日田市医師会の日田検診センターに施設運営を委託し検診事業を継続しています。

開設50周年を前に竹田医師会病院は、昨年4月に管内医療機関の大久保病院との輪番で二次救急医療機関として認可され、竹田・荻地区を主な担当地区として救急受け入れを行っております。また、災害拠点病院としての活動も精力的に実施し、昨年4月発生の熊本地震の際には、熊本県外の医療機関としていち早く現場での救護活動を行いました。地震発生翌日より竹田医師会病院を活動拠点とし、県内DMAT隊・東北DMAT隊と共に、竹田医師会病院DMAT隊は救助活動を実施致しました。石井院長以下職員の常日頃の訓練の賜物であり、竹田市医師会会員として非常に誇らしく思った次第でありました。

昨年4月には、竹田市内無医地区の一つである姥岳地区への巡回診療活動が評価され、へき地医療拠点病院を取得出来ました。非常に広範囲の地区のため患者様の送迎等に苦慮しておりますが、徐々に地域に診療活動が根付くにつれ、診療や医療相談に来られる方の人数も増えて来ております。

これらの救急医療・へき地医療などの活動が実を結び、平成29年5月15日に竹田医師会病院は豊肥地区で初めて地域医療支援病院の名称使用許可を大分県知事より頂く事が出来ました。許可申請の際には、今後も豊肥地区を視野に入れた活動の展開を希望するとのご意見も頂いており、更なる活動の展開が求められていると認識を新たにしております。

豊西准看護学院に関しては、これまで使用していた施設の老朽化により、施設の新築または移転に関し数年前より豊後大野市医師会との協議を重ねた結果、大分県立緒方工業高校跡地の一部を改修し学院として使用する事が昨年度豊西准看護学院の理事会で決議し、豊後大野市・大分県との協議で行政の同意も得て、本年度中に施設の改修工事を行い、平成30年4月の開設予定であります。なお、移設に関し大分県医療政策課、豊後大野市医師会の先生方のお力添えのお蔭であります事をご報告致します。

今後も地域住民の医療のために、竹田市医師会は活動を行って参りますが、県内でも交通の不便な地域であり、慢性的な医師・看護師不足が続いております。近年、職員の1/3が市外から通勤しており、貴重な戦力となっております。5月末には看護宿舎も完成致し、市外からの看護師の受入体制も充実しておりますので、ご興味のある先生並びに看護師の方がおられましたら竹田市医師会若しくは竹田医師会病院までご連絡頂ければと思います。

今後とも竹田市医師会並びに竹田医師会病院に、ご指導ご鞭撻を賜ります様宜しくお願い致します。

郡市医師会だより



異変の年

豊後大野市医師会

児 玉 礼 二

豊後大野市犬飼町は国道57号線の単独区間の起始地で大野川を中心に栄えた町です。縁あって当地で開業し13年目になります。

昨年6月に下血をして、ごとう消化器科・内科クリニックの後藤孝之先生に無理を言ってCFをして頂いた。問題なく帰宅できたが下剤を飲むと数日は腹具合が狂うので往診中の便意がとても辛い。それなら食べない方が楽だと、珍しく昼食を少し控えてみたら徐々にズボンが緩くなってきた。

この歳になっても母からは痩せるテレビ番組があると一報が入るし、妻は私が倒れてもその巨体は動かせないと嘆くし、皆から再三注意されていたのに動じる事なく今まで過ごしていた。8月は猛暑も手伝い順調に減量できたが多少の変化は誰も気づかない。9月、兄の還暦祝いの会でスリムになったと少し騒がれ、10月は痩せた姿を自慢しようと母を訪ねたが、意外にも第一声は、もう痩せなくていい、とぼつり言われた。喜んでいないし笑ってもくれなかった。12月、友人は事情を話しても一度全身精査をしろと半ば強制的？に専門医を紹介してくれた。年末の忙しい時期に無理を聞いて頂き検査をして下さった有田胃腸病院放射線科の脇坂昌紀先生、大変お世話になりました。先生から異常なしと聞いた時は舞い上がる程嬉しくて実に清々しい気分での忘年会に参加できました。検査を勧めてくれた明和記念病院の藤山寛三先生、色々ありがとうございます。何でも話せる友人達に恵まれ心から感謝しています。

12月末から入院中の母が極寒の1月深夜に逝った。こんな寒い夜中だなんて仕事に支障を与えぬ様こんな時間を選んだのか？勝手に思いながら病院へ急いだ。親を見送る年になり法事で親戚と会う機会がやたらと多い。叔父叔母達は皆80歳代、次は自分の番だと誰か呟いた。

木々が芽吹き春の気配がすると、犬飼町は大野川を中心に菜花色の風景に変わる。暑くて寒いこの地に来て、仕事と法事に明け暮れ？毎年同じ景色を見ている。天気の良い午後の往診途中、気に入りの川辺に腰を下ろし、いつも決まって深呼吸をする。ここは静寂に川音だけで何とも心地良い。3月初旬、古い友人の墓参りに17年経って初めて行った日を想う。若い頃の思い出は楽しく美しい。辛かった事も都合よく修正され今は愛おしい程心地良くて、全てが当時のままの若い姿で記憶に焼き付いている。無念にも46歳で急逝した彼に言いたい事が山ほどあった。今更ながら後悔ばかりが募るけれど、自分より五つも年上なのに何時までも青年のままで居続ける彼が何故か少し羨ましい気がした。

老いの苦悩を毎日見聞きしそれを実感できる年に近づいたせいか、一体何が良いのか悪いのか一瞬分からなくなる。

久々の春の眩い陽射と波紋を立てた突風で頭がやられそうだ。 さあ、そろそろ行こうか。

郡市医師会だより



“佐伯市医師会の近況報告”

佐伯市医師会
長 門 仁

佐伯市医師会は昨年小寺隆先生が会長職を退かれ、島村康一郎新会長のもと新しいスタートを切りました。それに伴い、西田尚史先生と私が佐伯市医師会の副会長に任命されました。

佐伯市医師会では健診センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、准看護学院の運営を行っていますが、それぞれが取り組むべき課題に直面しています。

健診センターは事業収益こそ順調ですが、佐伯市の特定健診の受診率が県内ワースト4とのことで、特定健診の受診率を改善すべく行政と一体となって地域住民の方への働きかけを行っています。

また、居宅介護支援事業所と訪問看護ステーションについては、総合事業の開始や入所施設の増加に伴い年々利用者が減少し収益が悪化してきており、事業の継続か休止かを決断する時期に來ています。

そして、佐伯准看護学院では先日第54期生の入学式が行われましたが、30名の定員に対して入学者は27名と、他の看護学校と同様に生徒の確保に苦慮しております。また、建物が非常に老朽化しており安全面、教育機能の面から施設の建て替えや移転を考えないといけない段階に來ており、島村会長を中心に行政への協力をお願いしている状況です。

この4月で熊本地震から1年になりますが、災害の恐ろしさやいざというときの備えが重要であると改めて感じさせられました。佐伯市は南海トラフ巨大地震の際には津波による大きな被害が予想される地域で、最大で13.5mの津波が押し寄せると想定されています。熊本地震をきっかけに佐伯市医師会としては災害時の対応を見直す必要があるのではないかとこのことで議論が重ねられました。その結果、各医療機関からの情報をできるだけ早く集める必要があるとの結論に達し、携帯電話やパソコンから安否確認や診療の可否、緊急の救援が必要か、などの情報が共有できる新しいシステム「オクレンジャー」をこの4月より導入することとなりました。これにより震災直後からリアルタイムに各医療機関の情報が分かり、被災者の救護活動が効率的に行われると考えております。その一方で、診療情報を共有するツールがなく、今後は、臼杵市の「うすき石仏ねっと」のように災害時にも患者さんの診療情報が共有できるネットワークの構築も必要だと考えています。

そして、いろいろなシステムを導入する以前に、何よりも多くの先生方に医師会活動に参加いただき、普段から顔の見える連携関係を築いていく必要があります。医師会の行事に参加される

会員の先生はまだ少なく、日頃から先生方との横のつながりを構築する必要があると痛感しております。

進化論で有名な自然科学者のダーウィンがこんな名言を残しています。

『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。

唯一生き残ることができるのは、変化できる者である。』

変化を恐れずに医師会が医療のスペシャリスト集団として地域を守り、患者のための医師会、市民のための医師会であるようにこれから頑張っていきたいと思います。



郡市医師会だより



大分県医師会の一員として

大分県医師会

吉 良 哲 也

7年間余り勤務していた大分医療センター循環器内科を退職して、平成24年から大在で開業している吉良哲也と申します。開業と同時に大分県医師会へ入会させていただき4年間の過ぎ、5年目の春を迎えております。大分県医師会は大分市の東部(大在、坂ノ市、佐賀関)を範囲とし、約55,000の人口圏になります。現在会員数85名の比較的小規模な医師会であり、自分も開業間もない若輩の身ながら、3年前から大分県医師会の監事を仰せつかっております。

大分県医師会は12年にわたり、会長職を務められ会員をまとめて頂いた三宅勝先生が退任され、平成28年度から澤口博人先生が会長に、井上徳司先生が副会長に新たに就かれています。医師会として予防接種、学校医活動、特定検診、在宅当番医業務など保健、福祉、介護の各種市民サービスに積極的に協力しております。医師会活動としては理事会、定時社員総会の他、夏の納涼親睦会、冬のフグ例会があり、会員間でも顔見知りの先生が多く、和気あいあいとした雰囲気で行われています。また大分県研究会、大分県臨床懇話会といった学術集会も年に10回程度、定期的に開催され、新しい知見を得る貴重な機会となっております。

大分県医師会会員として活動するようになり、勤務医時代には縁のなかった医師会の仕組み、重要性が少しずつわかるようになってきました。私事ですが、2年前に自宅のある自治体の自治会長を1年間務める機会がありました(小規模な新興住宅地なので会長は抽選で選ばれ、任期は1年です)。自治会長を務めてわかったことは、自治会に代表される地域コミュニティは、多くの人の献身的な仕事に支えられているということでした。自治会役員や民生委員、行政、警察、防災士、保護司といった多職種・ボランティアの人々が携わることで成り立っており、感謝の念を抱くとともに、多忙でしたが貴重な経験をさせていただきました。医師会も自治会と似たところがあり、時には自身の診療時間を割いての医師会活動への従事等、やはり多くの献身的な支えで成り立っていると感じています。自分は3年前から学校医として従事させていただき、今年度からは大分地域介護認定審査会委員となりました。正直不安な気持ちもありますが、当医師会のほとんどの諸先輩方が、過去に数期に渡り審査委員を務められていることを知り、自分も微力ながら医師会や地域医療の支えとなり、恩返しができればと思っております。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。